全国同人雑誌評

殿芝千恵

●**「私人」107号（東京都）**

上品な装丁と適度なボリュームで、まず物理的に手に取りやすい。全体的に社会問題を扱った作品が多い印象だった。特に**「お腹がすいた」（杉崇志）**はよくある児童虐待がモチーフかと思いきや、加害者側の視点が執拗に描かれており、初めは味方であったはずの母親が加害者である父親に言葉と暴力によって支配されていく様子につい引き寄せられる。改めて、家庭の中にある不幸は幸福と同じく、結果が同じでもその過程は様々であると思い知らされる。複層的な視点で描かれているこの作品の中で唯一、妻の母つまり主人公の義母の心理描写がほとんどないことが残念。ゲームチェンジャーとしての役割を持たせられたのではないか。

他には、一般の人間にはとにかく不可解で難解な、原子力発電事業についての作品**「水戸の梅」（根場至）**を挙げたい。昭和のサラリーマンの視点で日本エネルギー事業の光と闇、そこに翻弄される人々の小歴史を紡いでいて、正確な情報の記述と登場人物の心理描写のバランスが絶妙。日本の科学技術が国民のプライドを支えていた頃の残り香を感じた。大震災で受けた傷の大きさとその後の復興の困難さに目を奪われ、開発に関わったかつての英雄たちにもあったはずの喜怒哀楽や人生の隙間風に見ないふりをしていたのではないかと気づかされる作品である。

●**「遠近」79号（神奈川県）**

描写に臨場感があり、決してドラマチックな出来事ではないのに吸引力のある作品が多かった。登場人物の心情表現に寄り添い、つい同調させられてしまう「乗せ上手」な作者の宝庫。なかでも力のこもった時代小説が存在感を放つが、正直読むのに体力がいる。小説によって教養を得たいと思う読者には良いかもしれないが、あまり情報をつめすぎると楽しむより以前に理解する方に視点が傾いてしまうからだろう。しかし、この同人誌は編集者のセンスが抜群に良く、冒頭の数編の小説がその精神の日詰まりをほぐ

してくれる。

特に**「フォト・ピストル」（香山マリエ）**は信じる力の恐ろしさと、信じることしかできない女の弱さを如実に優しく、抒情をもって私たちに提示してみせた。人は自分が赦される前に先手を打って赦すことで何らかの優位性を保とうとしているのかもしれない。何もかも失ったトオルの母が最後に呟く「赦して」の重さに読者はきっと嘘寒い思いをするに違いない。他の作品もよく練られてはいたが、この作品ほどの心地よい着地点を得ることはできず、ふわふわと宙を漂うがごとくのラストが多かった。

●**「あるかいど」72号（滋賀県）**

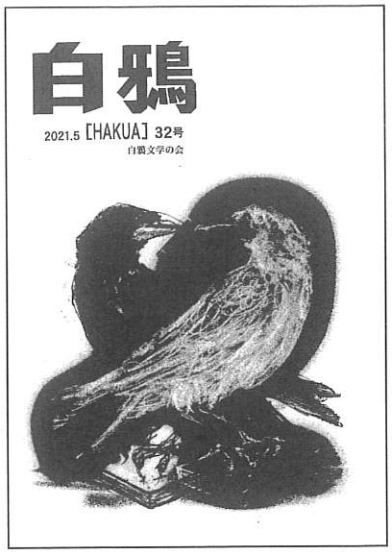
老舗の同人誌だけあって完成度が高かった。全体に通じるテーマは「災害と病苦」だろうか。中高年の男女に降りかかる様々なアクシデントが彼らの人生を掻き回し、惑乱させ、再生させていく様に魅せられた。やはり作者の年齢層にダイレクトに響くのか、「介護」「施設」というキーワードはかなりよく目についた。

その中でも読ませる力を感じたのは**「鳩を捨てる」（住田真理子）**。施設に入所させやれやれと思ったのもつかの間、せん妄に悩まされる母の尻ぬぐいに奔走する娘の日常をコミカルに描いている。が、捨てても捨てても舞い戻る鳩の執拗さにぞっとさせられてしまう場面は作者の表現力の真骨頂だろう。捨てきれない肉親の血の呪いを彷彿とさせるからか、とにかく目が離せない。最後の母の「がんばれえ、鳩、がんばれえ」は心底、怖い。肉体の健康を失った時、人の内面には感情も煩悩も色濃く燻るものらしい。

それを当事者目線でぶつけてくるのが**「面会時間（Visiting Hours）」（切塗よしを）**と**「オーロラ」（池誠）**。前者は人間の誠実でくるんだツンデレ男女愛、後者は健康と仕事と家族を失った男の埋蔵金への執着という全く違う方向の煩悩だが、両作とも清々しいほどに自分本位な心象描写がいっそ快かった。

●**「白鴉」32号（兵庫県）**

まずその大きなサイズに驚かされる。普通の同人誌のサイズはA5なので、携帯には不便なA4版は考え直した方が良いのではないか。ただその内容については、同じ方向



を目指しがちな同人誌においてバリエーション豊富だったことは特筆すべきだ。

特に**「思いがけなく」（大新健一郎）**は出色の出来であった。ごく普通の父子家庭として暮らしていた遠藤孝之はある日、一人娘の奈美の事故と入院の知らせを聞く。事故を知らせに来た、しかし身分を明らかにしない二人の男から詳細な情報を与えられずただ自分達に全てを任せるように言われた孝之は疑心暗鬼にかかる。最後に彼がとった行動は想像の余地を残してぼやかされているが、ここで大切なのは結末の彼の行動ではなく、善良な一般市民が国家の思惑にからめ取られた時の無力のやるせなさが描き切れていることだろう。これだけの枚数で平凡な家庭がその不幸を誰に相談することもできず、角砂糖が溶けるように瓦解していくさまは焦燥感を大いに刺激した。

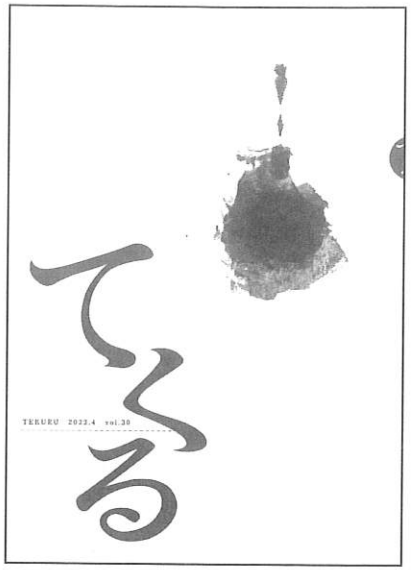
他にも不条理なSFが奇妙な味付けで楽しませてくれた。**「花と猫」（早水瑠美）**。

あと、読後感はやや冗長ではあったが扱いにくいモチーフであろう男性の抒情を細やかに描写しきったという点では**「にわたずみ」（水無月うらら）**も評価したい。改めて日本語の美しさを感じさせてくれる穏やかな描写は目に心にとても優しかった。

●「てくる」第30号（滋賀県）

日常に隠れた胡散臭さや、親しい人とのコミニケーションで感じる感情のささくれなどを上手に拾いあげた作品が多かった。奇想天外な状況での物語を提示してくれた作家もいたが、あまりに遠い世界の描写はそこに生きる人たちの感情がせめて自分たちに寄り添わないとどこまでも他人事でしかない。

そういった点で生臭いほどの日常の息遣いを感じたのは**「中野先生」（佐藤弘二郎）**。主人公はごく普通の中学生男子だが、クラブ顧問に根暗な教員が登場するところから暗雲が立ち込める。ひと世代前のいじめの負の連鎖が次世代の幼馴染三人をゆっくりと追い詰めていく。その中の一人の少女は真面目な母子家庭の中によろしからぬ義父が入り込むという悪環境にいる。作者の匙加減によってはとことん暗くなってしまう話がどこか一抹明るく、乾いた笑いを伴って目の前を通り過ぎていくのがよい。それにしても、



自分の夫はかつてのいじめの首謀者という事実にピリッとも動じない「ぼく」の母の凄さでもう一本書けそうな予感がする。

「さかなちゃん」（田中一葉）もよかった。男に薄く裏切られても相手を憎めない主人公にイラつかされる。が、自尊感情の育て方を知らない弱い人々の鈍感力の思いもよらぬ救いの力を読み取れる秀作。本当のことなど知らなくてよいのだ、と思ってしまう。

●「海馬」第45号（兵庫県）

ダントツに面白かったのは**「陰と陽の肉体（前半）」（永田祐司）**。読後の第一印象は「あか抜けた日本沈没」。コロナ禍と不景気を上手に組み合わせて、世情不安からスーパーナチュラルを求める人々のよろめきを魅力ある文章で展開している。お年頃の男三人に美女一人という組み合わせは読者をわかりやすく下衆な楽しみに誘い込み、登場人物たちはこぎれいに言い訳をしているが、予想通りの展開に安定した楽しみを感じられた。加えて、怪しさ満載の気功の世界についてそれなりの科学的根拠を用意し、説得力のある展開を試みているところの両方に作者の誠意を感じた。格好をつけず、とことん読者の楽しみために書いてくれている姿勢が伝わる。しかし、かなりの大風呂敷を広げた後をどうやってきれいに折り畳むのか、筆者の力量を後半でぜひとも確かめたく思う。

もう一つ、楽しみにしていた連作**「不能者」（山下定雄）**。前回の「葛藤」が良すぎたのか、正直楽しめなかった。タイトル通りの意味しか読み取れない、分かりやすい狂気では物足りない。「私」の中に潜む、静かで大人しい狂気の後日譚が読みたかったのだが、これは連作ゆえの構成上の必要部分なのか。完結するまでは評価が難しいのだろうが、敢えて言おう。普通に狂っている「私」に求心力はない。彼はもっと奇妙で、もっと薄気味悪く、遠巻きにずっと眺めていたい欲求を私たちに抱かせる魅力を持っていたはずだ。次回作でその魅力が存分に炸裂することを期待する。

全国同人雑誌評

森村和子

●「四国作家」54号（香川県）

「幾太郎の事件」（三木倍美）は史実に基づく創作である。幕末、日本の近海のあちこちに外国船が現れるようになると、瀬戸内海の小島、小豆島の近海にも外国船は現れた。小豆島を領地とする幕府の親藩津山藩は、小豆島で異国船の海防訓練を行い、村人に「異国船に近づくな」と命じていた。

一八六四年（元治元年）八月二十五日、十九歳の幾太郎は桶屋の仕事が休みになったので、仲良しの庄太郎家の漁網を引っ張る手伝いに行った。三日前から長州と戦ってきた英国船が魚を買ってくれ、銀で払ってくれた。魚を買ってもらった後、英国人が小型船の大砲を停泊していた船に運び上げるのを幾多郎と正太郎達が手伝うと、英国人は砲器類を見せてくれた。好奇心いっぱいの幾多郎は若い異人の短筒を喜んでのぞきこんでいたら、突然中から爆発して発砲する形になり、幾太郎は死んでしまった。異国船が絡んだ殺人なので代官所へも届けた。それに立ち会わなければならなくなった伊兵衛が、船を出してもらい異国船に行くと、異国船は船長が丁寧に応接してくれた上に、詫び、金子を差し出し、酒肴をすすめてくれた。しかし、伊兵衛は受け取らず、酒肴も辞退する。その後、総大将の提督の大船に案内され、提督が詫び、金子と酒肴を提供されるがまた断り、夜半に陣屋へ出頭した。翌日には幾太郎の野辺送りをした。

九月六日に役所からの出頭命令で伊兵衛は陣屋に出頭した。津山の隠居の大殿様（松平三河守斉民、号は確堂）の指図で、津山から来た若い鞍懸寅二郎が取り調べをした。伊兵衛に対し上からではなく対話のように話を進め聞いてくれた。伊兵衛は銀納が困難の事情も含め、笑顔で死んだ幾多郎の立場や、大砲を見慣れていること、金子、酒肴の辞退などを率直に話した。翌日津山へ赴き大殿様にお目通りをした。藩主は「この若者はわが藩の良民である。藩の手で異国に対し、正式の謝罪と償いを」と言い、協力を求められた。「異国とのもめごとで、本邦初の異国から謝罪や賠償を求める大仕事」と鞍懸は大殿直々の書翰を預かり伊兵衛とともに江戸に赴き、英国に抗議の談判をした。翌年一八六五年（慶応元年）英国が正式に謝罪し、洋銀二百枚の賠償金を払った。

伊兵衛の慎重さ、清廉で誠実な人柄と正義感、鞍掛の有能さが伝わってくる。さらに、気さくで親切な大殿が好奇心満々で伊兵衛に直に話を聞く様子がおもしろい。鞍懸と伊兵衛が江戸時代の制度の「飛船」に乗って津山へ向かうのも、話を盛り上げている。小豆島の暮らしや津山藩の統治、事件の遠因になった運上の銀納などを物語の中で無理なく語っている。江戸時代の中央集権体制が、こんな末端の若者の死をもなおざりにせず、しっかり対応し、中央まで話が届き、きちんと謝罪と賠償を獲得したことに恐れ入る。イギリスの姿勢も公正である。津山藩が親藩だったこともあったのだろうが、それぞれの部署でかかわった人が、ごまかさず正確に話を伝え正当に扱った結果である。幕末でも幕府の統治機構の揺るぎのなさを示している。日本が初めて異国から正式な謝罪と賠償を獲得した幕末の歴史的な一事件である。

作者はたくさんの資料にあたって読みこなし、時間をかけてこの作品を書いたのであろう。労作である。

●「クレーン」43号（群馬県）

「東日本大震災――一仙台市民の記録」（せとたづ）は生々しい記録で迫真力があった。筆者は東日本大震災に遭遇した、一人暮らしの高齢女性である。水も電気もガスも止まり、家は壊れ、中は家具が倒れ散乱している。年齢と女ひとりであることを考え合わせると、落胆し打ちのめされ立ち直れなくても仕方がない状況である。それでもそこに踏みとどまり、近隣の人や、知人、親類の人々の助けを得て、心豊かに暮らし、生活を立て直した。家は公的資金も得て、耐震補強工事を施し修復を成し遂げた。

震災後の出来事を記録する日記の文章は具体的で、生き生きと状況を伝えている。内容は、災害の多い国日本に住む私たちにとって多くの示唆を含んでいる。ぜひ、広く読まれたい作品である。

ただ、登場人物が多いので、掲載されたままではゴチャゴチャして人間関係がわかりにくい。日記文の前に、筆者と登場人物の簡単な説明があると読みやすくなる。

エッセイの「オンライン将棋を楽しむ」（和田伸一郎）は、将棋をする人の心理も書き込まれていて、おもしろく読めた。

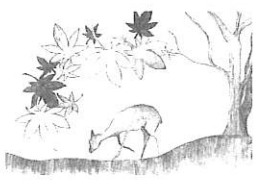
全国同人雑誌振興会

全国同人雑誌評

●『絵合せ』（福岡県）3号

「絵合せ」は、まだ3号と日が浅いが、書き手は揃っている。**波佐間義之**、**蓮実夏**、**見良津珠里子**と、実力ある作家が並んでいる。書くことへ情熱が匂ってくる誌だ。

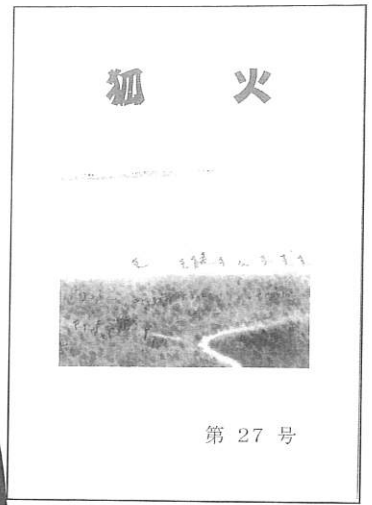
今号は特に**後藤克之**氏の**「逸脱」**がよかった。これは一〇〇枚ほどの力作で、推理小説のストーリー展開の上に、最後まで牽引力豊かに読ませる。九十歳の孤独な老婆が殺された事件を巡って、二人の刑事が犯人を突き止める筋立てでグングン進んでいく展開はおもしろく、飽きさせない。筆力は十分で、随所に筆者の実力を感じさせる人物描写やシーンが流れをうまく構成している。人物の特徴を掴む筆は冴えているのだが、それがしかし人間の奥深くを抉り出すところまで届いていないのが、惜しまれる。いったいに、こうした推理小説が真の文学の力を発揮するのは、推理小説のうまい運びやその謎解きの鮮やかな完結性にあるのではなくて、それを通して、いかに人生や人間の矛盾を浮かび上がらせるかにある。読み終わって、それが大きく浮かび上がるかどうかが勝負のしどころだろう。この小説は、容疑者が二人浮かび上がり、それを追い、犯人と犯罪を追い詰めていくストーリーになっていて、アリバイに駅の傘の紛失物届けを使ったりするところはよく工夫がしてあるが、肝心の老婆の孤独や、訪ねてくる中年独身男性の心の中や、隣にたまたま住んだ昔の恋人の内面や殺人動機は薄いままになっている。ことに最後になって、昔の恋人がすぐ近所に住んでいたというのは、後出しジャンケンで、それまでの推理構築が破綻する。この殺人動機と推理展開を通して、それぞれの内面のドラマをもっと深く描き出し、今日の孤独な老人の生き方や心理、老いの恋や、悪いと知りながら話し相手になって老婆のお金をくすね続ける中年独身男性の心の空白を時代の心象風景として描き出して剔出できていたら、ずっと深い現代のドラマになっていただろう。それぞれの人間の心の中の問題まで露わにすることが、純文学としての仕事のはずで、惜しいところで止まってしまっている無念さがある。書き直してもいいのではないか。準優秀作。



●『狐火』（埼玉県）27号

いつも地道に創作を続けているこの誌は、全体に文章に味わいがあり、とけるような滋味が匂っている。

澤つむり氏の**「小鬼やらい」**は、いつも自分の中に頭をもたげるその場に反した反抗衝動をうまく捉えていて、不吉な問題を呼び込んでしまう人間の中の困った行動を表現している。確かに人の心の中には、必ずしも建設的で同調的な行動だけが存在するのではない、自分でも気が付かないような反社会的な、その場を壊す衝動も潜在している。普段はそれをいろいろな形でうまく制御しているだけなのかもしれず、それがどういうところに由来し、どういうことからそれを内面に飼ってしまうのかわからないまま過ごしている。この小説はそれを書いていて、うまく擬人化しつつ一篇の小説にまとめ上げている。その手腕はさすがだが、全体として安全区域内で処理しているのが、作品を温和に留めている。現実にはもっと過激で、もっと破裂してしまう、抑制を打ち破る衝動もあるはずで、そこまでは筆を進めていない。現在は小さくまとまっているが、突然大きなものに化ける可能性も孕んでいる。準優秀作。

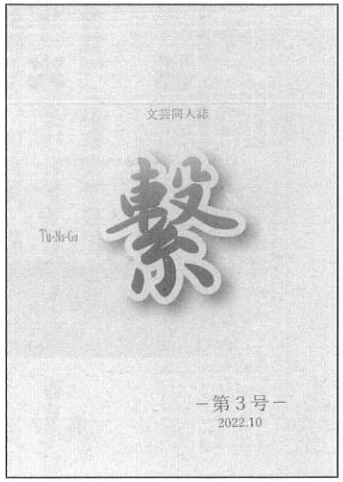


「父の庭」（山之内朗子）は、失われていく家と土地と庭への哀惜がよく描かれていて、胸に染みる読後感を醸している。現代の家族の散逸と喪失を時代の相としてうまく浮かび上がらせつつ、はかなく消えていくものへの愛情を残して、移りゆくものの姿を情緒深く描出している。家屋や庭や物理的に喪失されていくものの背後に、愛情の通っていた一つの家族の人間の姿が浮かび上がってきて、残る命の揺れが鮮やかに描かれている。その哀惜の中にこそ、実は尊く美しいものがあることを知らせてくれる。準優秀作。

●『繋（つなぐ）』（富山県）3号

新しい雑誌だが、強者（つわもの）揃い。飯田労、寺本親平両氏はまほろば賞、まほろば特別賞をそれぞれ受賞している。むらいはくどう氏も北陸では音に聞こえた書き手である。

寺本親平氏の**「血の湯」**は、独特の語り口で異世界へ導いてくれる。琵琶奏者でもある筆者は、その壮烈な楽音のうちに、古（いにしえ）の時空間へ一気にひたらせ、過去の因果応報と修羅の血生臭い世界へ読者を突き落とす。この世界に血が湛えられた温泉があるということ自体、強烈で、そこに罪



業と奇怪とを癒し、再生させる復活の奇跡があることを、華々しい幻想絵画の巡りのうちに展開していく。歴史に底流する血の流れと、異常の変化の罪が合流し、再生復活へと黄金の龍の姿を借りて上昇していく。確かにこれは一つの幻想ではなく、過去の夥しい血の犠牲の集積の底に潜む生々しい現実であることを、教えてくれる。ムカデや蛇笏と同次元の生き物の蠢きが、忌まわしさの中にむしろ再生の力を得て、天への上昇力となる。命の復活をうまく生命の根から血の幻想に載せて具現化した。優秀作。ただ細かい点で文章に手を入れる必要あり。

飯田労氏の**「私のエンゲル」**は暴力夫からの逃亡を軸に避難先の金沢の恩人の飼い犬エンゲルとの愛情を書いているが、まほろば賞作家らしからぬ安易な筋立てで、まずい酒を飲まされたような失望感があった。主人公の「私」が女性であることも不自然だし、DVも週刊誌的な既視感の上に浅く不快に描かれており、避難先の犬もリアリティがない。元々素材に無理があり、こういう素材をいくらうまく書き込んでも、光を発しない。もっと素材の選択に、意を注いでほしい。まほろば賞作家ともなれば、素材の選択や構成、表現にもっと時間をかけ、あまりの駄作、失敗作を出さぬよう発表にも慎重になってほしい。「あれはフロックだったのか」と疑われるのは不本意だろう。

●「日曜作家」（大阪府）40号

毛色の変わった書き手がいるこの誌は、不思議な魅力がある。それぞれが独特な視点、独特な世界を持っている。

特に今号で目立ったのは、**「迷宮のアグリアス」（小邑咲也）**だ。これは蝶の採集小説であると同時に、フランスの珍蝶のコレクターせり市まで繰り広げて、見知らぬ世界を見せてくれる。しかも蝶はカラーで印刷されており、手のこんでいる表現は比類がない。こんなに鮮やかで色のきれいな蝶がいることも新鮮だし、この蝶がいかに珍しく、

一羽がいかに高価な値段が付けられているかも、驚きだった。フィリピンの「ベンゲットアゲハ」や「アカネアゲハ」アマゾンの「ミイロタテハ」などその地での採集の様子も、臨場感に溢れ、風土が息遣いのうちに匂ってくるような錯覚さえ覚える。また「タランチュア」まで売り買いされているパリの「インセクトフェア」も未知の世界でおもしろい。オークションでミイロタテハが五〇〇万円まで吊り上げられるところなど、盛り上がるが最後に犯罪がらみのオチがあって、小説的フィナーレは少し興が削がれるが、珍しい世界を見せてくれるという点では、推薦作には推したい。

●「文芸中部」（愛知県）119号

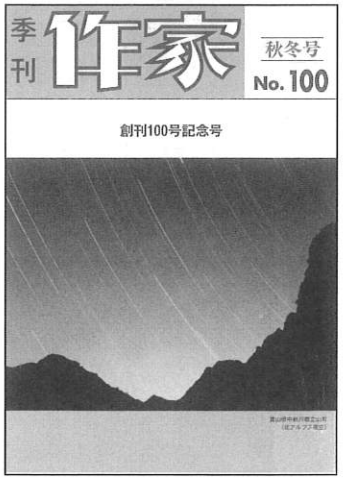
「クローゼットの中の家族」は久々に**北川朱実氏**の力作に触れることができた。アパートに一人住まいの女性の部屋に愛猫の死骸が段ボールに入れられて配送されるところから小説は始まる。血だらけになった猫の死骸に「私」は

全国同人雑誌振興会

作家集団「塊」プロ作家による
作品　添削講評
文芸誌新人賞作家があなたの作品を添削・講評の通信指導をします
懇切丁寧・的確な指導であなたの作品をレベルアップ！
八覚正大（新潮新人賞）・大高雅博（群像新人長編小説賞）・都築隆広（文學界新人賞）・小浜清志（文學界新人賞）・五十嵐勉（群像新人長編小説賞）
「文芸思潮」の読者にはメンバーが特別料金で指導いたします。
あなたの作品を作家集団「塊」宛にお送り下さい!!

詩		小説	
1篇　A4用紙2枚以内	3000円	1篇 20枚まで	7000円
エッセイ		50枚まで	10000円
1篇　5枚以内	5000円	100枚まで	15000円
10枚以内	6000円	200枚まで	20000円

●ご希望の作家と面談指導も可能です。
●ご希望の方には案内書を送付します。お電話・ファックス・葉書などでお問い合わせ下さい。
作家集団「塊」事務局
〒158-0083　東京都世田谷区奥沢7-15-13
TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848
bungeisc@asiawave.co.jp



ショックを受けるが、追い討ちをかけるように、それから猫の死骸に関係したものが手紙といっしょに届けられるようになる。相手は名前も住所も記されていない。一種の死骸ストーカーじみた恐怖に包まれ、それから逃れることを必至に試みるが、警察は取り合ってくれず、疑心暗鬼のうちにノイローゼに陥っていく。しかしあるとき、近所の孤独死した元大学教授の家から、「私」宛の手紙が発見されたことから、この老人が犯人であったことがわかる。老人は十年前に妻に先立たれた身で、しかもそれより前に五歳の一人息子を交通事故で亡くしている。寂しさと認知症の混じった孤独地獄の中での叫びがそこには充満していた。最後、外国へ旅立つという自治会長宛の手紙は、やりすぎの観がある。もっと身近なものの中に収束させた方がよかっただろう。またラストで「怒声が聞こえる」「すすり泣きが聞こえる」「笑い声が聞こえる」と畳み込んで終わっているのも、拡散してしまって着地に失敗している。タイトルももう一つピッタリこない。以前これに似たものを読んだような気もするが、最後とタイトルを修正してもらって、それがうまく行けば、優秀作。

朝岡明美氏の「曼珠沙華」は、彼岸花の象徴性がよく、出だしで死と近接する何かが始まりそうな気配がいいが、それが結末に響いてこないのが惜しまれる。後半もっと事件や人間に死の気配を絡ませてフィニッシュとし、曼珠沙華の花を見事に咲かせれば、いい作品になっただろう。準優秀作。

●「季刊作家」（愛知県）100号

「季刊作家」はついに一〇〇号に達した。この継続に心からの称賛を送りたい。「季刊作家」からは、津田一孝氏の「送り火の夜」、また今年の鈴木友範氏の「光復香港」と二人のまほろば賞作家が出ている。この厚みはそれ以前の「作家」からの伝統の上での成果であろうし、それを引き継いだ祖父江次郎氏の持続の労苦の上での結実であろう。一〇〇号は意義深く、拍手を惜しまない。

「創刊一〇〇号の記念エッセイ」が同人から寄せられているが、そこに到達までの足取りも窺われていい特集になっている。

本来「季刊作家」は地味な色彩のうちに重みと味のある作風に軸があるが、この号は特にそれがよく表れていて、巻頭の**佐藤文平**氏の**「見返り」**と**祖父江次郎**氏の**「枯野」**に、人生を総括する時期でなければ書けないテーマが浮かび上がっている。

「見返り」は、先に昇進させてもらった見返りに、女性を紹介して、その彼女が妻になる流れを底にしつつ、晩年どちらも妻を失った果てに、その彼が自分に会いに来て、零落と癌とを告白し、実は紹介した女性は自分の前の女だったと打ち明けるストーリーがうまくできている。やや作りすぎている観がなきにしもあらずだが、人生の晩年には人はだれでも健康や死別や零落をはじめとする荒波に襲われるその感慨の前に、むしろありうることとして許容できる深みがあり、それが逆に人生の陰影の深さとなって包んでくるところに、この小説の結実感がある。地味だが、ここまで小説としてまとめ上げた長年の技量の練磨を称えて優秀作としたい。

「枯野」も、定年後妻に先立たれて一人侘しく暮らす主人公の晩年の日々を、様々な変化の流れの上に身を浮かばせるようにして過去を振り返りつつ、枯れていく人生の風景を味わい深く表出している。羽振りのよかった昔の同級生に出会い、その凋落ぶりに肩を寄せ合うようにして競馬に興じる老年の姿も、晩年の淡い色を醸し出している。その友の自殺と飼い猫がアライグマに噛み殺されるところで閉じていて、ひとまずの終息になっているが、晩年の灰色の景色の息遣いはよく出ている。この雰囲気にもっと自然の描写を深く鮮やかに書き込んで、人生の終焉の模様を自然の中からも重ねて深めればさらに陰影は深まったろうと思われる。これも優秀作に推したい。

今号をまとめる。

優秀作

「血の湯」寺本親平　「繋（つなぐ）」3号

▲「クローゼットの中の家族」　**北川朱実**　「文芸中部」119号

「見返り」佐藤文平　「季刊作家」100号

「枯野」　祖父江次郎　〃

推薦作

「迷宮のアグリアス」　**小邑咲也**　「日曜作家」40号

準優秀作

「逸脱」　後藤克之「絵合せ」3号

「小鬼やらい」澤つむり「狐火」27号

「父の庭」　山之内朗子　〃

「曼珠沙華」朝岡明美「文芸中部」119号

（全国同人雑誌振興会／五十嵐勉）